

〈外国人としての日本人〉

「シヨパン」に3年間にわたって連載した「ウィーンの森の昼と夜」。
ふりかえってみれば、いろいろな思い出がある。

文を書くこと自体は文明の利器、ワープロに助けられてあまり苦には
ならなかった。とはいってもうそは書けない。内容のウラをとる作業は
思ったより繁雑で、資料の入手とその整理が何よりいちばん大変だった
ろうか。

写真については、はじめのうちはウィーンで美術の勉強をしていた大
山富夫氏に撮影を依頼していたが、途中からは自分でも1台カメラ（ニ
コンF11801）を購入して撮るようになった。ピントはもとよりスト
ロボの光量も含めてフルオート撮影でき、素人写真ながら結構きれいに
仕上がるのがうれしかった。しかし実際に掲載されるもの以外に、その
数十倍の数のボツになったフィルムが現在も段ボール箱に眠っている。

写真を眺めていておもしろいのは、私の体型とヘアスタイルの変化だ。
ピアニストという人前に全身を晒す仕事をしているくせに、もともと誇
れるような体型はしていない。

それでも一大決心してダイエットに取り組んだ事もあった。一度など
は10キロ程の減量に成功し、この成果を「シヨパン」の記事として書こ
うかと思っただけだった。

髪の毛も切ってみたり、伸ばしてみたり、チリチリにパーマをかけて
みたり、などといろいろ試みた。

「締切り」という言葉が脳裏に浮かぶ頃になって、ようやくテーマを考
える。もつと早くからやっておけば良いのに、と思うことは毎度の事な
がら、学生時代の一夜漬け勉強法に始まって以来、どうもある程度のプ
レッシャーがないとエンジンがかからない性格のようだ。

よし、これで行こう、と決めて、その後は写真撮影の段取りを組む。
前もって撮影許可を得なければならぬ場所も多かった。それと同時に
インタビュも行い、内容の骨子をまとめるわけだ。

苦労はあったが自分の勉強になったことも多く、こうしてまとまって
みると、その感激はひとしおだ。この紙面をお借りして東京音楽社の内
藤克洋社長、連載当時に編集を担当して下さった渡邊さゆり嬢、そして

この本をまとめる機動力として多大な御助力・御助言を賜わった富塚節子様をはじめとするスタッフの皆様には厚く御礼申しあげる。

ところで1989年は日本とオーストリアとの国交120年目となる年だった。これを記念して、玉三郎の出演する歌舞伎がウィーン国立歌劇場で公演したり、何かと日本の事がウィーンのマスコミの話題にもあった。

しかしわざわざこのような古ぼけた話を持ち出さなくとも、日本のすぐれた製品は店頭でもはやされ、オーストリア人の日常生活に深く浸透し、日本が「東洋の秘境」であった時代が遠い昔話となつてからすてに久しい。

私自身はヨーロッパで生活しはじめてからはや20年。振り返ってみれば長い時間である。その間にはウィーンばかりではなく、ドイツにも5年以上住み、仕事もした。

しかし才能や実力は別として、ヨーロッパにいる日本人はどう転んでも「外国人」、よそ者でしかない。五体満足とはいへ、髪の毛の黒いのと東洋人特有ののつぺりとした顔、そして足が短いだけは親から授かつたもので、何ともとりかえようがない。

ウィーンも含め、一般にヨーロッパの人々は親切である。外国人を見ても日本人のように物怖じしないし、言葉が通じないぐらいはへのカツパ。地図を広げて茫然と道端に立ちさえすれば、それを何とか助けんとしてくれる親切な人には事欠かない。

そんな親切な人がたくさんいる土地で勉強しよう、と思い立ち、留学終了後も日本には帰りたくない、できればここに一生住みたい、と希望する人も少なくない。

留学期限が終了し、さて日本に引き上げるとなると、親は見合い話をバツチり取りそろえ、てぐすねひいて待っている、とか、日本人独特の浪速節的心情が実は自分の肌には合わない事に改めて気がついた、とか、日本にはクラシック音楽を生活に密着した芸術として万人に理解してもらえないような土壌がない；等々、帰りたくなる理由は人によつてさまざま。

しかしここでひとつ老婆心。

観光客、あるいは学生としてヨーロッパに滞在するのと、実際に仕事を始めて現地の人間と競つていくのとは、その住み心地に雲泥の差が

生じるのである。

仕事の契約内容も多種多様だが、単にその日、その月、その年をつつがなく暮らせるだけのお金を稼ぎ出す以外にも、医療や税務処理、社会補償、そして老後の心配などを始めれば悩みは尽きない。

社会補償の事だけを考えて後先を考えずにヨーロッパの国籍を取得してしまつと、こんどは日本へ里帰りの都度日本大使館に行つてビザを申請しなくてはならない上、滞在期間には制限がある…など、二重国籍が原則として認められなくなった今日、自分の国籍を目先のメリットだけ考えて安易に変えてしまうのも考え物である。

ひと昔前「外国のオーケストラに入団する」という事が一種のステータスとも言えた時代があつた。しかしそれが人目につかなくなつてしまつた最近ではもうあまり流行らないし、第一オーケストラの方でもヨーロッパ人以外の外国人はあまり採用しない傾向にある。これは近々行われる欧州統合後には、おそらく一層強まるだろう。

…とか何とか言つても、食べ物にも「食わず嫌い」というのがあるように外国、そしてウィーンに「行かず嫌い」のままではあまりに残念だ。1回でも来られればそれに越した事はない。たとえそれが一泊二日でも、である。1週間、あるいは数カ月、数年、と滞在期間が長ければ長くなる程その印象と経験も深まるし、いろいろ身につく事も増えるだろう。

今現在ウィーン長期滞在を計画中のあなた、ドイツ語だけはきちんと勉強しておいて下さいね。母国語日本語の敬語が使いこなせないのもとても恥ずかしい事だけれども、現地の言葉ができる、できないは死活問題。滞在中に吸収できる知識の量にも大差が出ます。「行けば何とかなる」というのは必ずしも当たっていません。「来て何ともならない」人もたくさんいます。

ウィーンに1回でいいから行つてみたいいな、あるいはもう1回行きたいな、と思つてるあなた。是非いらつしやい！ ショッピングや観光も楽しいけれど、それより「命の洗濯でもしようかな」と思つてゆつたりと過ごす方が良いですよ。

ウィーンの街角でお会いできたらいいですね。声をかけて下さい。コーヒーぐらいつき合いますよ。